

述した本書の如きは、吾々が此種の著書に仰慕するの久しいこと
 しかも此種の適當なる著書をもつてゐないといふ點から見ても
 大に推稱に價するものと言はねばなるまい。

然しながら第二の點については著者の論結があまりに無難作に
 すぎなかつたかと疑ふ。例へば相對性原理の哲學的批判に於ても
 時間と空間との形式的本質から物理学上の相對論を單に批判哲學
 の立脚地によつて當然發想せられたるものと云ふが如きはあまり
 に輕易なる言説ではないか。物理学的時間はカントの直觀形式と
 しての時間とは尤で異つた意義あるものではないかと思ふ。著者
 の明言する所によつても相對性原理は時といふ經驗の形式其物に
 關するのではなく、此形式に構成せらるゝ内容に關した(同書二
 一四頁)ものであらう。相對性原理によつて主張せらるゝ時間は
 光によつて測られたる時間ではなければならぬ。この點に物理学の
 時間の最も重大なる意義あることは恐らく著者も否定すまい。相
 對性原理の認識論的解釋も此點に向けられねばならぬ。然しかく
 の如き時間を此の意味に於て相對化せんとするときは、光の主觀
 性から見て時間の相對性を論ぜねばなるまい。無論かくの如き生
 理學的見解は批判哲學の立場を去ることの違ひと共に著者の本意
 とする所でないことも明である。批判哲學の立場として唯一の可
 能なる解釋は時間と空間とを經驗の形式と見る點にあらう。然し
 物理学的時間が此種の形式とは異なることも争はれない。相對性原
 理に嚴密なる數學的基礎を與へんとしたミンコフスキーに於てき
 へもこの點は極めて明瞭にとかれてゐる。物理学的時間は光によ
 つて測定せられたる時間にして純論理的のものではない、物理学

に取扱はるゝ相對性は認識の相對性とは同一視する事ができな
 い。此等の點については發議論の要することでありかゝる疑ひも
 著者の本意を誤解したものである。かもしれのがたゞ讀過の際に得
 た感想を記してこの好著の紹介に加へたいと思ふ。岩波書店發行。
 定價洋圓二十錢。(中川得立)

世界心國家心個人心

文學士 大島 正徳著

歐洲大戦亂は、國家といふことを廣く深く、感ぜしめた點に關
 しては大いに力がある。本書もその一動機を、世界的戰爭に發し
 てゐる。「世界心國家心個人心」といふと何だか理解し難いが、或
 は「人格と國家」と稱してもよいと言はれて居る。人格觀念を根
 極として、國際關係を論じ、國家を論じ、又國民生活を論じられ
 たものである。

第一篇世界心——國際論では、戰爭といふ事實の在するにも係
 はらずして、世界心——世界的道義心の存在することを主張し、
 此の世界心と國家との關係を論じ、平和主義と軍國主義とを批評
 せられて居る。第二篇國家心——國家論に入つては、國家の意義
 國家と社會、國家と個人、立憲政體と我國體、法治國と學治國の
 諸問題を論じ、第三篇個人心——國民論に至つては、我國國民精神
 の現狀と自覺の必要、英國及其國民性、獨逸國及其國民性、英獨
 の特質と我國國民の用意、我國及國民性の長短を論じ、此等の題下
 に、國民としての覺悟、用意を説き、更らに、教育制度の改善を
 提案し、教育者の自覺を促して居られる。

以上の如く、戰爭や、我國現今思潮界の傾向等よりして起り來

る實際問題を取扱つたものであつて、體系を備へた學理的研究所といふのではないが、又必ずしも學理的根柢を度外視せず、何處迄も眞摯な、學究的態度を以て論ぜられてゐる。初號に紹介せられた鹿子木氏の燃え立つ熱は無いが、強い底力の籠つた良書である。東京内外教育評論社發行、四六版、四三一頁定價圓三十錢。(尾生光三郎)

佛敎心理の研究

橋 惠 勝 著

佛敎に於ける無爲思想は直觀主義にして言詮を以て之を説明する事不可能なれども經驗主義なる有爲思想は之を自覺開發の資料として科學的方法を以て之を現代的體系に整理し學者の批判に提供せんとし現代的に佛敎の權威ある事を古典的事實に依て確證せんとする第一着手として氏は本著を公にせられたのであつた。氏先づ第一章序説に於て佛敎の無我説と外道の我論とを比較し佛敎の無我説は解脫の原理として説くものにして存在の原理として説くものにあらずその解脫思想の要點自我の觀念を構成せる因縁を心理的に觀察して觀念運動の上に常一主宰なき事を説き外界の存在も覺觀するものゝ内界の事實なりといふにあり、そして觀念運動の成立を緣起的に觀察する事は佛敎哲學の出發點なるを以て佛敎を心理的方面より研究する事は佛敎研究の基礎なりと主張して居る、次に第二章に入りて五蘊を説き五蘊皆空の理趣は佛敎の第一義なりと雖も五蘊の相續に依りて顯現する現象界ある事を否定せず現象界の作者受者が果して何物なれば不可得なれども吾人内の生活の經驗的事實に依りて有我を説くのみ、そして内部の精神

過程に生起したる直接經驗を五蘊といひ經驗の所産として外界に顯現したる觀念世界の内容を五取蘊とし五蘊と五取蘊との區別を示して居る、氏が本書最後に五取蘊なる一章を設けて「支那の學者及び傳承に泥著して心眼の盲いたる我邦の學者は五蘊の色と五取蘊の色との相異なる事をさへ知らざるは謬見の酷しきものなり」と論じて居るこの點が新研究の結果であるらしい然しその根據の今尙薄弱なるを憾む、更に進んで氏は色句義(第三章)に就て論ずる所あるも要する所只色を廣義に詮する時は法處所攝の色をも統攝して五蘊の同時的存在にありて對象の觀念を悉皆積集する義なれども十色處を積集する義なる時は相對の造色を意味するものにして感覺的内容を表示するものなりとするの外引文又引文殆ど煩はしく更に要領を得ぬ、第四章所造色を論じ所造色とは觀念世界の客觀性にして經驗の再生または創造したる一切の現象をいふものなりと定義し五根、五境、無表色の三項に別ちて引證紹介して居る、次に第五章に及んで心意識に就て稍細に之を述べて居るがつまり心意識の三は觀察の精確なる事を要求するために施設したる概念の差別なるが故に、心心所の二名も亦畢竟深遠に推求すれば義の差別にすぎずとし、佛敎の心理的觀察は學者の考察に發達の跡ある事は歴然たりと雖も大體上釋尊の創見なる五蘊の分類を體素として繼承し内省的觀察の細目に於て學者の實驗を基礎として説明を加へたるものなるが故に生理的方面の研究に於て最近の泰西の學説に及ばずと雖も論理的施設の精妙なる事は泰西の心理學者の未だ窮知せざるものなりとして佛敎の心意識論を古典のまゝ引用列示して居る、第六回心所有法に於ては心所法とは、思索